蠅を憎む記

泉鏡花

青空文庫

上

いたづら為たるものは金坊である。初めは稗蒔の稗の、月代のやうに素直に細く伸びた葉尖を、フツ〳〵と吹いたり、※たけた顔を斜めにして、金魚鉢の金魚の目を、左から、又右の方から視めたり。

やがて出窓の管簾を半ば捲いた下で、腹ンばひに成つたが、午飯の済んだ後で眠気がさして、くるりと一ツ廻つて、姉の針箱の方を頭にすると、足を投げて仰向になつた。

目は、ぱつちりと※いて居ながら、敢て見るともなく針箱の中に可愛らしい悪戯な手を入れたが、何を捜すでもなく、指に当つたのは、ふつくりした糸巻であつた。

之を指の尖で撮んで、引くり返して、引出の中で立てて見た。

然うすると、弟が柔かな足で、くる〳〵遊び廻る座敷であるから、万一の過失あらせまい為、注意深い、優しい姉の、今しがた店の商売に一寸部屋を離れるにも、心して深く引出に入れて置いた、剪刀が一所になつて入つて居たので、糸巻の動くに連れて、夫に結へた小さな鈴が、ちりんと幽に云ふから、幼い耳に何か囁かれたかと、弟は丸々ツこい頬に微笑んで、頷いて鳴した。

鳴るのが聞えるのを嬉しがつて、果は烈しく独楽のやう、糸巻はコトコトとはずんで、指をはなれて引出の一方へ倒れると、鈴は又一つチリンと鳴つた。小な胸には、大切なものを落したやうに、大袈裟にハツとしたが、ふと心着くと、絹糸の端が有るか無きかに、指に挟つて残つて居たので、うかゞひ、うかゞひ、密と引くと、糸巻は、ひらりと面を返して、糸はする〳〵と手繰られる。手繰りながら、斜に、寝転んだ上へ引き〳〵、頭をめぐらして、此方へ寝返を打つと、糸は左の手首から胸へかゝつて、宙に中だるみ為て、目前へ来たが、最う眠いから何の色とも知らず。

自ら其を結んだとも覚えぬに、宛然糸を環にしたやうな、萌黄の円いのが、ちら〳〵一ツ見え出したが、見る〳〵紅が交つて、廻ると紫になつて、颯と砕け、三ツに成つたと見る内、八ツになり、六ツになり、散々にちらめいて、忽ち算無く、其の紅となく、紫となく、緑となく、あらゆる色が入乱れて、上になり、下になり、右へ飛ぶかと思ふと左へ躍つて、前後に飜り、また飜つて、瞬をする間も止まぬ。

此の軽いものを戦がすほどの風もない、夏の日盛の物静けさ、其の癖、こんな時は譬ひ耳を押つけて聞いても、金魚の鰭の、水を掻く音さへせぬのである。

さればこそ烈しく聞えたれ、此の児が何時も身震をする蠅の羽音。

唯同時に、劣等な虫は、ぽつりと点になつて目を衝と遮つたので、思はず足を縮めると、直に掻き消すが如く、部屋の片隅に失せたが、息つく隙もなう、流れて来て、美しい眉の上。

留まると、折屈みのある毛だらけの、彼の恐るべき脚は、一ツ一ツ蠢き始めて、睫毛を数へるが如くにするので、予て優しい姉の手に育てられて、然う為た事のない眉根を寄せた。

堪へ難い不快にも、余り眠かつたから手で払ふことも為ず、顔を横にすると、蠅は辷つて、頬の辺を下から上へ攀ちむと為る。

這ふ時の脚には、一種の粘糊が有るから、気だるいのを推して払くは可いが、悪く掌にでも潰れたら何うせう。

下

其時まで未だ些とは張の有つた目を、半ば閉ぢて、がつくりと仰向くと、之がため蠅は頬べたを嘗めて居た嘴から糸を引いて、ぶう〳〵と鳴いて飛上つたが、声も遠くには退かず。

瞬く間に翼を組んで、黒点先刻よりも稍大きく、二つが一つになつて、衝と、細眉に留まると、忽ちほぐれて、びく〳〵と、ずり退いたが、入交つたやうに覚えて、頬の上で再び一ツ一ツに分れた。

其の都度ヒヤリとして、針の尖で突くと思ふばかりの液体を、其処此処滴らすから、幽に覚えて居る種痘の時を、胸を衝くが如くに思ひ起して、毒を射されるかと舌が硬ばつたのである。

まあ、何処から襲つて来たのであらうと考へると、……其では無いか。

店へ来る客の中に、過般、真桑瓜を丸ごと齧りながら入つた田舎者と、それから帰りがけに酒反吐をついた紳士があつた。其の事を謂ふ毎に、姉は面を蔽ふ習慣、大方其の者等の身体から姉の顔を掠めて、暖簾を潜つて、部屋まで飛込んで来たのであらう、……其よ、謂ひやうのない厭な臭気がするから。

と思ふ、愈々胸さきが苦しくなつた。其に今がつくりと仰向いてから、天窓も重く、耳もぼつとして、気が遠くなつて行く。——

焦れるけれども手はだるし、足はなへたり、身動きも出来ぬ切なさ。

何を！これしきの虫と、苛つて、恰も転つて来て、下まぶちの、まつげを侵さうとするのを、現にも睨めつける気で、屹と瞳を据ゑると、いかに、普通見馴れた者とは大いに異り、一ツは鉄よりも固さうな、而して先の尖つた奇なる烏帽子を頭に頂き、一ツは灰色の大紋ついた素袍を着て、いづれも虫の顔でない。紳士と、件の田舎漢で、外道面と、鬼の面。——醜悪絶類である。

「あ、」と云つたが其の声咽喉に沈み、しやにむに起き上らうとする途端に、トンと音が、身体中に響き渡つて、胸に留つた別に他の一疋の大蠅が有つた。小児は粉米の団子の固くなつたのが、鎧甲を纏うて、上に跨つたやうに考へたのである。

畳の左右に、はら〳〵と音するは、我を襲ふ三疋の外なるが、なほ、十ばかり。

其の或者は、高波のやうに飛び、或者は網を投げるやうに駆け、衝と行き、颯と走つて、恣に姉の留守の部屋を暴すので、悩み煩ふものは単小児ばかりではない。

小箪笥の上に飾つた箱の中の京人形は、蠅が一斉にばら〳〵と打撞るごとに、硝子越ながら、其の鈴のやうな美しい目を塞いだ。……柱かけの花活にしをらしく咲いた姫百合は、羽の生えた蛆が来て、こびりつく毎に、懈ゆげにも、あはれ、花片をゝのゝかして、毛一筋動かす風もないのに、弱々と頭を掉つた。弟は早や絶入るばかり。

時に、壁の蔭の、昼も薄暗い、香の薫のする尊い御厨子の中に、晃然と輝いたのは、妙見宮の御手の剣であつた。

一疋、ハツと飛退つたが、ぶつ〳〵といふ調子で、

「お刀の汚れ、お刀の汚れ。」と鳴いた。

また気勢がして、仏壇の扉細目に仄見え給ふ端厳微妙の御顔。

蠅は内々に、

「観音様、お手が汚れます。」

「けがれ不浄のものでござい。」

「不浄のものでござい。」

と呟きながら、さすがに恐れて静まつた。が、暫時して一個厭な声で、

「はゝゝゝはゝ、いや、恁又ものも汚うなると、手がつけられぬから恐るゝことなし。はゝはゝこら、何うぢやい。」と、ひよいと躍つた。

トコトン〳〵、はらり〳〵、くるりと廻り、ぶんと飛んで、座は唯蠅で蔽はれて、果は夥しい哉渦く中に、幼児は息が留つた。

恰も可し、中形の浴衣、繻子の帯、雪の如き手に団扇を提げて、店口の暖簾を分け、月の眉、先づ差覗いて、

「おゝ、大変な蠅だ。」

と姉が、しなやかに手を振つて、顔に触られまいと、俯向きながら、煽ぎ消すやうに、ヒラヒラと払ふと、そよ〳〵と起る風の筋は、仏の御加護、おのづから、魔を退くる法に合つて、蠅の同勢は漂ひ流れ、泳ぐが如くに、むら〳〵と散つた。

座に着いて、針箱の引出から、一糸其の色紅なるが、幼児の胸にかゝつて居るのを見て、

「いたづらツ児ねえ。」と莞爾、寝顔を優しく睨むと、苺が露に艶かなるまで、朱の唇に蠅が二つ。

「酷いこと！」と柳眉逆立ち、心激して団扇に及ばず、袂の尖で、向うへ払ふと、怪しい虫の消えた後を、姉は袖口で噛んで拭いて遣りながら、同じ針箱の引出から、二つ折、笹色の紅の板。

其れを紅差指で弟の唇に。

一寸四辺を※して又唇に。

花の薫が馥郁として、金坊は清々して、はツと我に返つた。あゝ、姉が居なければ、少くとも煩つたらう。

青空文庫情報

底本：「日本幻想文学集成1　泉鏡花」国書刊行会
1991（平成3）年3月25日初版第1刷発行
1995（平成7）年10月9日初版第5刷発行
底本の親本：「泉鏡花全集」岩波書店
1940（昭和15）年発行
初出：「文芸界」
1901（明治34）年6月
※ルビは新仮名とする底本の扱いにそって、ルビの拗音、促音は小書きしました。
※初出時の表題は「部屋の弟」です。
入力：門田裕志
校正：川山隆
2009年5月10日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

蠅を憎む記

泉鏡花

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/